

佳作

「寺島尋常小学校」

鳴門教育大学附属中学校一年 千鳥 桃愛

私は友達の祖母の板東廣子さん（八十歳）にご自宅のある新蔵町で昔の話を聞いた。板東さんは昭和十九年生まれ。現在もお住いの新蔵町で生まれ育った。小学校は内町小学校に通ったらしい。

内町小学校は、昭和七年に徳島市寺島尋常小学校となり、昭和十六年に徳島市寺島国民学校と校名改称、また昭和十八年に徳島市立内町国民学校と校名改称され、昭和二十年には焼い弾を主とする空襲を受け、鉄筋コンクリート校舎の大半を焼失してしまう。昭和二十一年に戦災復旧工事が始まり、昭和二十二年には学校教育法公布により徳島市立内町小学校と改名されたようだ。板東さんが小学校に通っていた頃には既に内町小学校となっていたらしい。私はその当時の内町小学校のあった場所を聞いてびっくりした。私がいっつも買い物や自習に行ったりしているなじみのあるアミコという商業施設辺りにあったらしい。また、私は、寺島本町に住んでいるのだが、私の住んでいる地名が以前内町小学校の名前に使われていたということにもびっくりした。

板東さんが通っていたころ、一学年は五クラスあり、なんと一クラス五十人から五十五人の児童がいたらしい。今は一クラス三十三人くらいだから全然違う。また、小学校の隣に産業会館の建物があり、今と逆で人口がどんどん増えていった時なので子供の人数も増え、教室が足りなくなり、産業会館の上の階を二クラスか三クラス部屋を借りて教室にしていたようだ。それでも教室が足りず、講堂を仕切って教室にもしたようだ。講堂の隣の教室との壁板はととても薄く、一番後ろの席になった板東さんは、隣の教室の先生の話の方が大きく聞こえたと言っていて話してくれた。今は少子化なので真逆である。それから板東さんが小学生の時代にも給食があったらしい。脱脂粉乳と堅いコッペパン、味噌汁、鰯カツ、鰯の角煮など。この脱脂粉乳がまずくて強烈な臭いがしていつも鼻をつまんで飲んでいたら板東さんが笑顔で話してくれた。一番びっくりしたのは、給食はお母さん達が交代で小学校に作りに行っていたそうだ。また病氣などで欠席をした友達には、堅いコッペパンを藁半紙（わらばんし・茶色い下級印刷用紙）に包んで放課後に自宅にまで届けていたそうだ。今では衛生面などの点から給食のパンを友達の家に届

けることはしていないが、戦争後には食料も行き届いていないので堅いコッペパンひとつにしても貴重な食料だったし食べ物大切にしていたので届けていたのかなと思った。また、まだまだパン食が一般家庭では珍しい時代だったと言っていた。

学校での服装は、一応制服があったが強制ではなかった。セーラー服の方が多かった。履き物は低学年は下駄が多かった。セーラー服に下駄：想像すると面白いファッションだ。ゴム靴はクラスに一、二人いたので、とてもうらやましかったと板東さんは言っていた。ひも靴の運動靴（スニーカー）は学年に一、二人程度だった。昭和三十年以降はスニーカーの人が多くなっていたようだ。通町にあった「えんどう」と新町にあった「こんどう」に下駄を買いに行っていた。新しい下駄を買ってもらうと、とてもうれしかったらしい。きっと私がナイキのスニーカーを買ってもらったような気分だったんだろうなと思った。体育の授業はもちろん裸足だったらしい。怪我をしてはいけなかったので週に一回の朝礼では、石ころ拾いが常だったらしい。今では考えられない。

この後、内町小学校は昭和五十三年に今の徳島市徳島町城内へ移転される。近所にありながら私の知らなかった内町小学校の歴史の一部を聞くことができとてもよかった。私の家から内町小学校が見える。でも以前の内町小学校はアミコになっていて見えない……。私の周りにも見ることはできない以前の〇〇〇があるはずだ。そんな以前の〇〇〇を探していきたいと思った。